

〈恩送り〉の奇跡／軌跡、時間と記憶のアレゴリー
 — 福島県立いわき総合高等学校総合学科第十五期生
 アトリエ公演『失われた時を与えて』
 後藤隆基

はじまりはたぶん、ブルースだった。

二〇一〇年五月から翌年三月まで、当時は千葉を拠点に活動していた三条会（関美能留主宰）という劇団が、マールセル・ブルーストの小説『失われた時を求めて』全七篇を一篇ずつ、約一年間かけて上演する企画を行なっていた。その最終回——第七のコース『見出された時』（構成・演出＝関美能留／二〇一一年三月二十四～二十八日／千葉・三条会アトリエ）が初日を迎える二週間ほど前に、あの災禍は起きた。「そしてある日、すべてが変わる」

ラウル・ルイス監督の映画『見出された時』（一九九八年）の一節が、三条会版『見出された時』の底を、つねに流れていた。「すべてが変わる」ってしまった「ある日」以後の世界で、ブルーストの原作を縦系に、三条会が上演してきた作品群の引用を横系に、わたしたちが存在する／しない〈時間〉

への問いを織りあげた作品だった。はじまりは、もしかしたら、もつと

前。二〇〇四年六月のこまばアゴラ劇場。大学院の先輩に誘われ、初めて三条会の演劇を観た。三島由紀夫の『近代能楽集』から「班女」と「卒塔婆小町」をつなげた作品。三島戯曲を緻密に読み解いた趣向の数々と裏腹に、どこか知らなく、笑えてしまう。舞台上の出来事が、よくわからないけれど、滅法おもしろい。その（わからなさ）に惹かれ、千穂菜まで劇場に通いつめた。それから公演を観つづけるようになった。

二〇一七年のある日、関美能留氏から声をかけられた。「いわき総合高校のアトリエ公演で演出するんだけど、手伝ってくれない？」
 何をすればいいのか、日程さえも詳しく聞かずに「いいですね、ぜひ」と即答した。それがいつだったか、思い

出すことができない。

これらは、わたしにとつてのはじまり探し。わたしはこのアトリエ公演にある種の〈記録者〉として携わった。二〇一七年十一月からはじまった稽古（授業）に幾度も同行し、演出家や生徒の声、ことばを文字に記録した。当日パンフレットには「上演台本制作」とクレジットされる。作品に対して直接のつくり手ではない、しかし第三者ともいえないわたしは、思えばいわきに通っているときから（わたし）の置きどころに惑い、公演から一か月が過ぎた今も惑いながら、小考を記している。

* 福

福島県立いわき総合高等学校（以下、いわき総合高校）の総合学科には、芸術表現系列（演劇）というコースがある。かつて福島県立内郷高等学校（以下、内郷高校）と呼ばれていたこの高校は、二〇〇三年度の準備期間（第一期生）を経て設置学科が総合学科に転換され、次年度からいわき総合高校と校名が変わった。同校独自の演劇教育は、日常の授業に加え、生徒が自分自身に向きあう「自画像」公演、東京から気鋭の演出家を招いて作品を創作するアトリエ公演と卒業公演を三本柱に、カリキュラムが展開されているよ

うだった」。

はじまりが、内郷高校の総合学科転換であったことは言を俟たない。今回関美能留が演出を依頼されたアトリエ公演の実現に至る経緯には、ちよつと奇跡と呼んでもいいような出来事があった。さしあたって過去のアトリエ公演をならべてみよう。

- ①第一期生『肉体改造クラブ 女子高校生版』作・監修＝古城十忍／演出＝いしみちこ／二〇〇四年二月二十九日（※当時の校名は内郷高校）
- ②第二期生『転校生』作＝平田オリザ／演出＝詩森ろぼ／二〇〇五年二月二十六・二十七日（※二〇〇四年度からいわき総合高校に改名）
- ③第三期生『陽だまりの猫』作＝金井博美／構成・演出＝横田修／二〇〇六年二月二十五・二十六日
- ④第四期生『あるいていこう』構成・演出＝長谷基弘／演出協力＝いしみちこ／二〇〇七年二月二十四・二十五日
- ⑤第五期生『あいだにあるもの』作・演出＝関根信一／二〇〇八年二月二十三・二十四日

⑥第六期生『世界の終わりとシヨートケーキ』構成・演出Ⅱ阿部初美／二〇〇九年一月三十一日・二月一日

⑦第七期生『いわきのあゆみ』作・演出Ⅱ柴幸男／二〇一〇年一月十・十一日

⑧第八期生『いわきの高校生 in the 蚤の市』構成・演出Ⅱ篠田千明／二〇一一年一月二十九・三十日

⑨第九期生『ハロースクール、バイバイ』作・演出Ⅱ藤田貴大／二〇一二年一月二十八・二十九日

⑩第十期生『ブルーシート』作・演出Ⅱ館屋法水／二〇一三年一月二十六・二十七日

本来であれば、予算問題等の現実により、第十期生の『ブルーシート』を以てアトリエ公演は幕を下ろすはずだったという。ところが、同作が第五十八回岸田國士戯曲賞（二〇一四年）を受賞し、館屋法水がその賞金をいわき総合高校のアトリエ公演存続のために寄付したことで、アトリエ公演は一度を限りとして復活。二〇一三年の『ブルーシート』から三年後に上演されたのが、第十三期生の『はだかのオオカミ』（作・演出Ⅱ危口統之／二〇一六

年一月三十・三十一日）である（だから、第十一期生と第十二期生はアトリエ公演を経験していない）。危口統之（悪魔のしるし主宰）を推挽したのは館屋だった。

話はこれで終わらない。二〇一五年のF/T（フェスティバル／トキヨ）で、いわき総合高校を卒業した第十期生が、初演時から先の現在を反映した『ブルーシート』（十一月十四・十五日、十二月四・六日／豊島区旧第十中学校グラウンド）を再演、その出演料を母校に寄付し、アトリエ公演は再び復活する。館屋から危口に渡されたバトンには、また次へ送られることになる。

第十四期生の一年を空けた第十五期生による（最後のアトリエ公演）の演出家に、危口が関を推薦するのだが、その危口は二〇一七年三月、四十二歳で病没してしまう。館屋から危口へ、第十期生から第十五期生へ、そして危口から関へ――。存在するはずのなかった十二回目のいわき総合高校総合学科アトリエ公演は『失われた時を与えて』（作・演出Ⅱ関美能留／二〇一八年一月二十七・二十八日／いわき総合高校三階演劇実習室）と名づけられた。第十五期生は十九人（男子五人、女

子十四人）。四人の女子が「時間」の役、三人の女子が「神様」の役。役名からわかるように、彼女たちは劇中でやや特殊な位置にいる。他の十二人は「生徒」の役だが、彼／彼女たちは四人ずつ三つのチーム（授業・影絵・すく／以下、ここでは便宜上、生徒①・生徒②・生徒③と記す）に分かれている。

舞台空間のスケッチを試みると、ホリゾントの前に机が十四台、前後二列に並び、前列（客席側）の机に椅子が七脚、逆さに載っている。窓側（下手）の手前に置いてある電光掲示板は、劇の各所で時間を視覚化（デジタル数字）する役割を担う。

上演時間はおおよそ九十分前後で、ほぼ二部構成。前半は安瀬一夫校長の挨拶で幕を開け、時間役による電光掲示板を使った「時間遊び」のあと、生徒①（男女二人ずつ）が授業前の休み時間を自由に過ごす日常的な会話の場面に移る（この間、電光掲示板には十分のカウントダウンが映される）。十分後、授業のはじまりを告げるチャイムが鳴ると神様が現れ、授業と称してブルーストの『失われた時を求めて』のあらすじ（超簡略版！）を一篇ずつ解説し、それを順番に生徒②（女子四

人）が影絵で表現する。

授業が終わると、先輩（女子一人）と後輩（男子三人）の生徒③が登場してすごろくを始める。これに勝った生徒（当然公演によって変わる）が（王さま）になる権利を得て頭上に王冠を戴き、次の（サイコロゲーム）へ場面は変わっていく。王さまになった生徒がサイコロを振り、出た目の数字の数だけ他の生徒（神様以外）が舞台に入退場して増減し、最終的に全員が揃ったところで、時間と神様以外の生徒たちが舞台中央で輪になる。

すごろくにせよ、サイコロゲームにせよ、稽古の中で（遊び）のように行なわれていたことが作品にいかされている。ここまでの場面で、時間遊びや授業前の休み時間は電光掲示板を用いて時間が視覚化され、わたしたちを支配する時間の存在を現出させたが、すごろくも、時間と同様にコントロールできない運命の表現として機能する。サイコロゲームでは、わずかに神様がサイコロの目を操る瞬間がある（最後の最後は生徒自身の手で決めねばならない）ことで、時間や運命に支配されない可能性とともに、あくまでも「神様」の仕業であって、やはり抗いきれない絶対性も同時に示されていた。し

かしそれらが（おおよそ九十分前後）という上演時間の揺れをはらむ、劇全体の時間をめぐる不確定要素であり、一面では偶然性のなかの自由でさえあったのかもしれない。

——と、ここまでの（あらずじ）を書いてみたものの、抽象度の高い『失われた時を与えて』において、それが果たしてあらずじとして機能しているのか、甚だ心もとないのだが、ともあれ先へ進んでいこう。

サイコロゲームのあと、生徒たちが舞台中央で輪になって座り、時間役の四人がシエクスピア作『冬物語』^②の第四幕第一場の説明役「時」のせりふをいう（小田島雄志訳。以下、ゴシック体はアトリエ公演時の改変箇所）。

ある人々に楽しみを与え、すべての人々に試練を課し、善人の喜びともなれば、悪人の恐怖ともなる私、間違いを起こしたり解きほぐしたりする「時」と名乗って

翼を使わせていただきます。十四年間を飛び越えて、

その長い歳月のあいだに生じたいっさいのことを

説明抜きにいたしますが、その早

すぎる飛翔を、どうか

お叱りになりませぬよう、法律をくつがえすことも、

ある習慣を植えつけると同時に根こそぎ引き抜くことも、

私の権限なのですから。最古の秩序が生まれる以前も、

現在の秩序が支配しているいまも、私はいつも

同じ私であるとお思ってください。私は秩序の生みの親である

過去の各時代を目撃してきました、同様にいま栄えている

もつとも新しい秩序を目撃し、その新鮮な輝きを

いまの私の話と同じく陳腐なものといいたします。砂時計を

転回しますお許しを願えれば、皆様が夢うつつのあいだに

舞台はだいたいぶ前へ飛ぶことになり

ます。これからもご退屈しないよう「時」は願います、心から。

具象的に数字（時間）を刻み続けた電光掲示板に対し、生徒たちがつくる

円形は時計の見立てとなり、その周囲を神様が回ること、時間の流れが表現

される。当初神様は反時計回りに歩き

続けるが、『冬物語』のせりふに導かれたあと、音楽（久石譲「人生のメリーゴランド」）。なお、同曲が用いられる映画『ハウルの動く城』も二〇〇四年の公開）をきっかけに、歩行が時計

回りに切り替わる。前半の諸場面は生徒たちの日常。現在時間だったわけだが、思えば時間役が時間遊びをする際

も、円形を描く歩行で時間の経過を表現するときはつねに反時計回りだった。それまで徐々に過去へ遡行しつつ

けていた時間が順方向に転換した瞬間から、作品は後半部へ一気に動きます。

ここからは『失われた時を与えて』の眼目である過去のアトリエ公演の総

集編になる。前掲した第一期生から第十期生、そして第十三期生の作品（と

本作を含む十二本）を一人ずつ紹介していく場面では、二〇〇〇年生生まれの

第十五期生が各作品の上演時に何歳だったかが語られ、アトリエ公演のはじ

まりにまで遡行した生徒たちは、一品ずつに自分自身の時間（＝成長）を

重ねながら、アトリエ公演の時間をたどっていく。その中から『転校生』『い

わきのあゆみ』『ブルーシート』『はだかのオオカミ』の四作品が、一部を抜

粋して実際に上演される。最後の、アトリエ公演にふさわしいといえ、これ

以上の趣向はないだろう。ないだろうが、しかし。

「そしてある日、すべてが変わる」冒頭で紹介した、三条会版『見出された時』の鍵言葉になっていた一節が

『失われた時を与えて』でも場面が変わるごとに随所で用いられ、アトリエ公演の総集編でも作品紹介のたびにこの一節がくり返される。やがて「ある日」が来る。第八期生による『いわきの高校生』『E.S. 蚤の市』（二〇一一年一月）を最後に『失われた時を与えて』からこの一節は消える。以降は「すべてが変わる」ってしまっただけの時間である。

『ブルーシート』では原作の幕切れ近い場面のせりふをいいながら、一人ひとりが教室の中の椅子と机を積み上げて塔を築いていく。そして『はだかのオオカミ』の、王さまの手紙を読むラストシーンに接続される。王さま（すぐろくの勝者のせりふ。別れのあいさつ。神様の〈声〉で塔は崩れ落ち、瓦礫（机と椅子）の中で生徒たちは王さまを呼び、探しつづける。机と椅子が片づけられ、次の場面である教室の風景に変わったあと、王さまのせりふ——「全部ウソでしたー」を受けて、生徒たちは窓の向こうの空に手を振った。

『ブルーシート』から『はだかのオオカミ』に至る一連の場面を観た人は、少なからず『はだかのオオカミ』の作者を思い、生徒たちの姿に涙したことだろう。しかし——あえて告白しなければならぬ。その作者のことをわたしはよく知らなかった。彼の作品も観たことがない。でも、それでいいのだと思う。窓の向こうに見えたのは、すべての観客（あるいは演者）それぞれととつての（誰か／何か）であつて、

単一の解釈や意味に収斂されたり、固定化されたりすることはない。見えな

いもの、そこにいない人、そこにいら

れなかった人、来られなかった人——そうした不在の存在をさえ感じさせる演劇固有の表現が、たしかにそこにはあつた。

〈恩送り〉ということばがある。いわゆる〈恩返し〉とは少しく異なり、自分が受けた恩を、別の誰か——次へ送るということ。いわき総合高校総合学科第十五期生アトリエ公演『失われた時を与えて』は、ほんとうは失われるはずだったにもかかわらず、前述したいわば〈恩送り〉の連鎖によって実現した奇跡のような時間であり、過去のアトリエ公演全作品の総集編というかたちで、その軌跡自体を演劇化した作

品だった。アトリエ公演という歴史、記憶、ひとつひとつの作品やそれらにかかわった人たちに捧げられたオマージュでもあつた。

ただし、そこで終わらないのが『失われた時を与えて』に仕掛けられた時間と記憶のアレゴリーである。それは劇中にひそやかに、しかしはっきりと表現されている。

アトリエ公演の総集編は、劇全体の第六場にあたる。窓の外に手を振っていた生徒たちが一人、また一人と退場したあと、残った男子生徒が力強く叫ぶ。

いわき総合高等学校総合学科、第十五期生アトリエ公演『失われた時を与えて』……作・演出＝関美能留……二〇一八年一月二十七日・二十八日……僕は、今、十七歳です！

自らの現在の表明。そこから場面は教室の風景になる。第二場「授業の前」で男女二人ずつ四人の生徒が演じていた、休み時間の会話。それが最終場である第七場でふたたび演じられるのだが、登場するのは第三場「授業」『失われた時を求めて』で影絵を担当して

いた生徒たちだ。開演前から客席の前に座り、第二場まで舞台を観客と一緒にみていた彼女たちが、第二場をそのまゝ再現しようとする。役名は第二場の生徒たちの名前で、男子の役も女子が演じる。そこで演じられる場面は、

第二場の再現のだけれど、けつして正確な再現ではない。要所は押さえて

いるものの、少しずつオリジナルからずれていく。それは記憶の曖昧性と多

分にかかわるもので、再現の正確さよりも〈なりきる〉というある種のゲームをたのしむような感覚もある。各人がもつ記憶の集合と即興性をよりどころとするパフォーマンス自体がきわめて劇的な表現であり、むしろそのずれこそが、彼女たちが生きるみずみずしい〈いま・ここ〉を保証する何よりの根拠となるのだ。

第七場は第二場と異なり、電光掲示板が時間を順方向に刻む。十分経つとチャイムが鳴り、授業のはじまりを待つところで、劇は終わる。

しかし、休み時間の十分が終わっても、カーテンコールが終わり、観客がいなくなっても、電光掲示板のカウントアップは止まらない。劇の時間をはみ出すように、現実世界の時間に接続されて、どこまでも時間は流れつづける。

「失われた」「時」を「与え」とは一体どういうことなのだろう。そんなことが可能なのか。そもそも「失われ」る前の「時」とは何だったのだろう。

あるいは「与え」というそれを、受けとる側の存在がいたとして、主体の立ち位置を逆転すれば「失われた時を

与えて（ほしい）」という、喪失（した者）からの願ひとも読めるのかもしれない——などといったら、いささか恣意が過ぎるだろうか。

時に遊びを交えながら生徒たちの現在を構築してみせた前半部から、後半部ではアトリエ公演の過去に遡行し、はじまりの第一期生から順番に時間を下つて、第十五期生自身による最後のアトリエ公演『失われた時を与えて』にたどりつく。そこに描かれた第七場

はたぶん、いつか（＝未来）の時間。彼／彼女たちの日常（＝現在）が、新たに演じ直されることによって、先の時間での生を獲得する、次へと送られる未来へのまなざしである。もしかしたら終わりではない、という可能性を示唆するそれを、恥ずかしげもなく希望と呼んだっていい。『失われた時を

与えて』は（アトリエ公演（の歴史））というフレームを用いながら、じつは彼／彼女たち自身の時間と記憶をたど

りなおし、現在を、そして次の時間を探し、紡いでいく旅でもあったのだから。

① 福島県立いわき総合高等学校「実践研究「生きる力」の定着を目指して——芸術・表現系列「演劇」の授業実践から」(『中等教育資料』二〇〇

四年四月)、いしのみちこ『高校生が生きやすくなるための演劇教育』(立東社、二〇一七年)、安瀬一夫『第15期生アトリエ公演』(『失われた時を与えて』当日パンフレット、二〇一八年)を参照した。

② 三条会は二〇一一年一月に、ザ・スズナリで『冬物語』を上演している。